
ビーボージェネラル

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビーボジェネラル

【Nコード】

N1855S

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

ビットワールドのスピノフついに誕生！全51話。

第一話 冒険開幕

X - B I V O 達がビットワールドに襲来した。

ベリーと校長は、必死に追っ払っていた。

「じいちゃん、こいつ等いくら攻撃しても数が多すぎてたちうちできねえぞ。」

「そうじゃの。」

X - B I V O が、私立パイレーツ学校の一部を破壊した。

「わしの学校を良くも。」

しかし、数が多すぎるせいで太刀打ちがうまくいかない。

ブックブック人のマイランドにも X - B I V O の襲来が現れた。

「ここは、危険だ。逃げろー!」

ブックブック人は、争いが好きではないため、武器を持っていない。

X - B I V O に襲われたブックブック人の青年は、ビーボランリーをジャッキーホールに落としてしまった。

「ああ!」

ビーボランリーは、人間界に落ちて行ったのである。

人間界では、ごく普通の暮らしをしていた。

「梅也、今日どこに行く？せつかくの夏休みを無駄にできないからさ。」

「行く場所は考えていないな。晴戸はどうなの？」

「俺も、あんまし考えていないな。」

琳紗と合流した。

「私も行く場所考えてないの。」

その三人の前に、ビーボランリーが落ちていた。

「なにこれ？」

「なんだか見たことも無い物だね。」

スイッチが突然入り、画面からビーボが現れた。

「わっ、怪物が出てきた！」

「違うよ。僕たちはビーボ。ビットワールドの生命体だよ。」

「ビットワールド？それってどんな世界なの？」

琳紗が言った。

「ビットワールドを知らないのか。ということは人間界の者たちなの？」

「わけがわからないけど、ビットワールドのことを教えてくれ！」

晴戸は、エストというビーボにビットワールドのことを教えてくれた。

「ビットワールドというのは、いろんなビットモンやビット人などが暮らしている世界なんだ。しかし、ジャッキーによって世界は食い荒らされてそこに誕生したのがジャッキーホールというわけ。ビットワールドと人間界は、ジャッキーホールのあるせいでつながってしまっただ。」

「へえー分かったよ。ビットワールドのことが。」

「えっ本当ー！」

「でも、ビットワールドに行く気がしないな。」

「ちえっ、せつかく教えてやったというのに面白くないの。」

ブイツとした表情を見た晴戸は少しあわてながら言った。

「ごめん、ごめん。行く気はあるけど。」

一方、ビットワールドでは・・・

X・BIVIOは、7つの蒼いクリスタルを持っていた。

「此の七つの蒼いクリスタルから、ビーボのデータのある者に食わせよう。貢物の代わりにな。」

「はっ！」

「ケルベロス1調子はどうだ。」

「X・BIVOの行動力と攻撃力が上がっている。しかし防御力をあげるほうもいいと思う。」

その頃、人間界では・・・

X・BIVOの5体が、人間界にやってきた。

晴戸は、エストと一緒に、梅也は、カチキランと一緒に、琳紗は、ヒマワリンと一緒にになった。

X・BIVOは、人間界の公園を破壊し始めていた。

晴戸たちは、急いで向かった。

「何だ、ビーボなのか？」

「違う晴戸、あれはビーボではない。」

X・BIVOは、晴戸達を見た。

「こっちを見てるぞ！」

「俺達に任してくれ！」

エスト達が、リアライズした。

「ポットファイヤー！」

「勝伝！」

「種ボンバーマシンガン！」

X - B I V Oは、行動力が早かった。

「何っ行動力が早い！」

X - B I V O達は、エストを攻撃しまくった。

「エスト、大丈夫か。」

「平気だ。こんなの、俺達の力が弱いわけではない！」

しかし、石モグラとノリマキトカゲがX - B I V Oの標的にされてしまった。

「まずいつ助けなくては。」

第一話 冒険開幕（後書き）

次回 第二話 覚醒始動。お楽しみに！

第二話 覚醒始動

X - B I V O が、ノリマキトカゲと石モグラに襲いかかろうとしていた。

「石モグラ、此处は僕が止める。先に逃げてくれ。」

「でも、ノリマキトカゲ・・・」

「良いから行け！」

「分かった。」

「ノリマキシュート！」

ノリマキトカゲの攻撃がX - B I V O に命中した。

エストとカチキランとヒマワリンは、X - B I V O を攻撃し始めた。

X - B I V O を包んでいた黒い霧が消えた。

X - B I V O の姿は、ニンジンに待針の針が串刺しになっている姿をしていた。

「何だ、あの姿は。」

ビーボランリーが突然光り始めた。

「此の光は、何だろう。」

「エスト覚醒実行！覚醒完了エスト2！」

「カチキラン覚醒実行！覚醒完了カチキラン2！」

「ヒマワリン覚醒実行！覚醒完了ヒマワリン2！」

X・BIVOは、ノリマキトカゲに攻撃しようとしたがエスト2たちに止められた。

「助けてくれてありがとう。」

「はやく、石モグラの所に行ってくれ！」

「うん、分かった。」

X・BIVO5体はエスト2たちに攻撃を仕掛けた。

「針を飛ばして来たぞ！」

「エターナルブラスト！」

「勝利のラッシュ！」

「小さき花の吹雪！」

X・BIVOの攻撃を跳ね返して、5体のX・BIVOを倒した。

「やったー！」

3人は喜んだ。

3体のビーボは、元の姿に戻った。

「すげえーぜ！あのカッコよさ。」

「そうよ。もう一度見てみたいな。」

ビーボは、エヴォリユーションではなく、Arousalである。

一方・・・

「人間界で、^{リアルワールド}X - B I V O 5体が覚醒したビーボに殲滅されただと！んなつ馬鹿な。」

「本当らしいです。X - B I V Oをアップグレードしなければなりません。」

「そうだな。」

人間界・・・

「もしかしたら、人間界のビーボが狙われるかもしれないからビクトワールドは、まだ行かないことにするよ。」

エスト達は、そう決意した。

X - B I V Oが人間界に降り立っていた。

その姿は、黒い姿のアイスロックと黒い姿のトロピカルドックと黒

い姿のおちゃワンがいた。

ビーボジェネラルNOW

X - B I V Oの名前と姿を大募集。

そのX - B I V Oがどんな姿をしていてどんな名前なのかを寄せて、感想ページに書いてくれ！

3体のX - B I V Oは、一体のビーボを連れさらった。

一体のビーボそれは、電ワンコだった。

第二話 覚醒始動（後書き）

次回 第三話 電ヲンコを救え！。お楽しみに！

第三話 電ワンコを救え！

三体のX - B I V Oは、ジャーク族の一人に電ワンコを渡した。

「いいぞ、三体のかわいいX - B I V Oよ。」

「ありがとうございます。」

「しかし、電ワンコは、人質にする。」

「選ばれた者呼び出すためにですか？」

「その通りだ。X - B I V Oの諸君。」

三体のX - B I V Oは、しばらく待機することにした。

3人は、ビーボランリーの警告音に目が覚めて、急いでその場所へと向かった。

晴戸達は、檻の中にいる電ワンコを見つけた。

「ようこそ、我がおもしろき場所へ。」

すると3体のX - B I V Oがひとつになった。

「これが、合体したビーボの姿だ。」

その姿は鎧武者の姿のようであった。

エスト達をリアライズさせた晴戸達は、ビーボを急いで覚醒させた。

「エスト覚醒！覚醒完了エスト2！」

「カチキラン覚醒！覚醒完了カチキラン2！」

「ヒマワリン覚醒！覚醒完了ヒマワリン2！」

合体されたビーボは、口から炎をはいて襲い掛かった。

「エターナルブラスト！」

「勝利のバースティング！」

「ジャイアントフラワーグランドソウビ
巨大花咲變怒薔薇」

この三つの攻撃が合体ビーボに命中した。

ジャーク族の一人は逃走した。

晴戸達は、エスト達とともにジャーク族を追いかけた。

第三話 電ヲンコを救え！（後書き）

次回 第四話 衝撃のX - B I V O。お楽しみに！

第四話 衝撃のX - B I V O

晴戸達は、ジャーク族の一人を必死に追いかけた。

ジャーク族は、一人の人間に出会った。

「馬鹿かお前は。」

「あつ、いたぞ！」

「二人もいる。誰だお前等！」

その少年は、笑った。

「はははは、ガキども。俺の名は、矢間郡鉄だ。」

「矢間郡鉄、X - B I V Oを使うのはやめろ！」

エストの言葉に、郡鉄は無言だった。

ジャーク族の一人、トゥラインダンは、X - B I V Oを召喚した。

「X - B I V Oよ。ガキどもを倒せ。」

「ネクロテイル！」

三人と三体は、吹き飛ばされた。

「あいつ、攻撃しやがったな！」

晴戸は、X・B I V Oを蹴散らす方法を考えていた。

「晴戸、何かいい考え思いついたのか。」

「いま、考えているところだよ。」

「何だよ。」

「カチキラン2攻撃を。」

「おう！勝利のバスタートップ！」

X・B I V Oは、いったんひるんだのだが、再び立ち上がった。

「ちっ、こいつ立ち上がりが早い。」

第四話 衝撃のX - B I V O (後書き)

次回 第五話 エスト新たな覚醒。お楽しみに！

第五話 エスト新たなる覚醒

「立ち上がりが早い。」

晴戸と琳紗は、少し困っていた。

エスト2とヒマワリン2は、後ろから攻めることにした。

「食らえ！エターナルブラスト！」

「巨大花台風金剛塵！」

X・B I V Oに大ダメージが与えられたと思ったのだが・・・

「やったか・・・なに？」

トウラインダンは晴戸達に言った。

「此のX・B I V Oの名は、メルトサイン。どんな攻撃も溶かしてしまうのさ。」

「だから、攻撃を食らっても溶かしてしまうから無傷なのか。」

「なら、攻撃力を5倍にして連続撃ちにするんだ。」

「おう！」

三体のビーボが出力を上げた攻撃をメルトサインに連続撃ちにした。

「これで倒れるはず。」

しかし、メルトサインは無事だった。

「これでは勝てない。」

「殺れ、メルトサイン！」

「ネクロテイル出力10倍！」

三体のビーボは、襲われて動けにくい状態になった。

「エスト！」「カチキラン！」「ヒマワリン！」

「さあ、結晶に変えてしまえ！」

「メルトサイクルインパクト！」

ビーボランリーが突然光った。

「エスト2覚醒！」「エスト3覚醒完了！」

エスト3は、メルトサイクルインパクトを打ち消した。

「何だと！」

「こっちの番だ！ソウルビックハリケーン！」

メルトサインは、結晶になってしまった。

「さらばだ。」

ジャーク族の一人は、何処かへと行ってしまった。

ビットワールドでは、一つの帝国が作られていた。

「ふふふ、ビットワールドは我々の者だ。」

つづく

第五話 エスト新たなる覚醒（後書き）

次回 第六話 ビットワールドに聳え立った帝国。お楽しみに！

第六話 ビットワールドに聳え立った帝国

レーガと矢間は、トウラインダンを待っていた。

「待ちくたびれたぞ！」

「すまない、メルトサインがやられたからさ。」

矢間は、ビットワールドに存在する1000個のマイランドを一気に支配する帝国「ダークビット帝国」を創設させていた。

矢間とレーガは、ビットワールドをかつてない危機に陥れた8大不思議についてを調べていた。

「八大不思議について何かわかったか？」

「まだ分からない。しかしつい最近ジャッキホールがビットワールドと人間界の時空の波長が合わない状況が続いている。」

「ということは八大不思議の一つが暴れたことでこうなったということか。」

ダークビット帝国には、1000のマイランドを10個に分けた地域にした。

人間界では・・・

セイドー達がビットワールドに行くことを決めた。

「ビットワールドに何が起こっているのかが気になる。」

「そうだな。このままでは恐ろしいことが起きるぞ。」

ソウメ達も行くことを決めた。

「それじゃビットワールドにレッツアクセス！」

六人は、ビットワールドに行くことにした。

ビットワールドで待ち受けている謎に挑むためである。

「ついに来たな。」

第六話 ビットワールドに聳え立った帝国（後書き）

次回 第七話 マイランドの甘い罠、謎の甘党ビーボ。お楽しみに！

第七話 マイランドの甘い罠、謎の甘党ビーボ

ビットワールドに訪れたセイドー達。

「此処がビットワールドか。」

「しかし、様子がおかしい。」

エストが、驚いた表情で見ていた。

「セイドー、あれを見て。」

「ビットワールドにあの宮殿は。」

「今までなかったよ。しかもあそこから暗黒エネルギーを感じる。」

ビットワールドの状態は、こういう状況である。

暗黒の紫の雲がビットワールド全体に覆われており、ところどころ金色の光が見えるが罠の信号である。

そして、更に1000にも及ぶマイランド100個ずつに分けて10の地域を作った。

彼等がいる場所は、そのマイランドの一つである。

地域名、甘党のX・BIVOが指揮を務める場所。

「この地域にX・BIVOの存在がいるのか。」

そこに疲れている目玉子がいた。

「おい、大丈夫か。目玉子！」

「エスト、X・BIVOの大群が僕達を攫って行った。助けてください」

目玉子は走りつかれて気を失ってしまった。

ソウメは言った。

「セイドー、リーサ。聞いたか。」

「ああ、許せねえ！」

「そうよ、いきなり大群で襲って攫うなんて酷い奴らだわ。」

「俺達で、X・BIVOを倒すぞ！」

ぼくごくどんがエスト達を見つけて言うてあげた。

「X・BIVOの大群が城の中にいます。」

「この城も前はなかった。」

「それにしても、変だよ。甘党ビーボの正体突き止めなければな。」

「ああ、そつだ。」

甘党のビーボの正体それは、
マーガ・レレレーアというX・B I V
Oであった。

第七話 マイランドの甘い罠、謎の甘党ビーボ（後書き）

次回 第八話 レレレーアの攻撃態勢、倒して見せるカチキラン3
！。お楽しみに！

だんだん、展開が怪しくなってきたのは、甘党ビーボが原因です。

第八話 レレレーアの攻撃態勢、倒して見せるカチキラン3！

目玉子に案内されたセイドー達は、驚く場面を目撃した。

「まずい、お前等が作ったもの甘くもない。よって死を持て。アルファスオールリスティー！」

目玉子や料理系ビーボが結晶になってしまった。

「なんて酷いことしやるんだ。」

エストの怒りは、カチキランにも届いた。

「俺もだ。こんな奴がビットワールドの一部支配しているのが許せない！」

「ビットワールドは、みんなの世界だ。だろっセイドー！」

「ああ、そうだよ。エスト行くか。」

「カチキランも行くか。」

「おうっ！」

「エスト覚醒！」「エスト2覚醒完了！」

「カチキラン覚醒！」「カチキラン2覚醒完了！」

ヒマワリンは、料理系ビーボ達の救出作戦に入った。

レレレーアは、2体のビーボを見た。

「覚悟しろ！」

「下らん。お前等も消去してやる。」

エストの攻撃がレレレーアに命中した。

「無礼者め死ね！アルファスオールリスティー！」

「くっ、あああああ！」

「エスト2！」

「此処は俺に任せろ！」

カチキラン2とソウメの目が燃えていた。

「グラードランチ！」

「効かぬ！グランデイスイノセン！」

「負けるわけにはいかない。カチキラン行くぞ！」

「ああ、燃えてきた闘志を絶やすわけにはいかない！」

「よしっ！カチキラン覚醒！」「カチキラン3覚醒完了！」

「なにつ！」

「こつちも行くぞエスト。」「オツケー！」

「エスト2覚醒！」「エスト3覚醒完了！」

3形態のビーボが二体になった。

「最後の甘き攻撃！」

3形態のビーボには、通用しなかった。

「何だと！」

「勝利列島拳！」「バーニングツワーシャワー！」

レレレーアは、攻撃を受けて大爆発した。

「やったー！」

「こつちも救出完了したよ。」

「サンキュー、ビーボジェネラル。」

レレレーアは結晶になった後、消滅した。

その直後、次の場所への扉が開いた。

「次に待ち構えている相手と戦うことになるのか。」

「絶対ビットワールドを救ってやる此の悪の手から。」

第八話 レレレーアの攻撃態勢、倒して見せるカチキラン3！（後書き）

次回 第九話 第二のエリア、危険迫る怪しき存在。お楽しみに！
次回ヒマワリンが3形態に覚醒します。懐かしきバグリンが舞い上がるエリアでどんな戦いが繰り広げられるか。

第九話 第二のエリア、危険迫る怪しき存在

ビーボジエネラルそれは、人間とビーボがパートナーになり、共に戦い、共に暮らしていく選ばれし者達のことである。

セイドー達は、何かを確認しに行っていた。

「エスト、何かわかった。」

「バグリンの死骸を見つけた。」

バグリンのデータの残骸が、そこら中に散らばっていた。

「敵軍の奴、とてつもなく強い奴だろう。」

「そうだな。確かに強さを感じる。」

その時、何者かがセイドー達に近付いていた。

セイドー達は、何やら黒き者を見た。

「誰だ？」

「第二のエリアの副隊長、ゴイサノヴァンタンである。」

第九話 第二のエリア、危険迫る怪しき存在（後書き）

次回 第十話 美しき花の力、ヒマワリン3。お楽しみに！

第十話 美しき花の力、ヒマワリン3

「お前達は、此处で何をしている。」

「なにつて、お前を倒しに来た。X・BIVOはなぜ生まれた。」

エストがゴイサイノヴァンタンに問いかけた。

「ふん、そんなものは教えない！」

「だったら、叩きこんで教える行くぞセイドー！」

「よしっ！」

「うん！」

「エスト覚醒！」「エスト3覚醒完了！」

「カチキラン覚醒！」「カチキラン3覚醒完了！」

「直接突破戦式！」「グラティスバスター！」

「スピーディアスハードファイア！」

3つの技が相殺した。

「こうなれば私も！」

「ヒマワリン覚醒！」「ヒマワリン3覚醒完了！」

「スリーアウトイースト！」

ゴイサイノヴァンタンは避けた。

「お前らなどの攻撃は甘い！カガーゼボットー！」

エスト3とカチキラン3が吹き飛ばされた。

「負けるか。勝利絶対浄化拳！」

第十話 美しき花の力、ヒマワリン3（後書き）

次回 第十一話 バグリンと融合！危機訪れた時の力。お楽しみに！

第十一話 バグリンと融合！危機訪れた時の力

ゴイサイノヴァンタンの行動は早かった。

「勝利絶対浄化拳を避けやがった。」

エスト3とカチキラン3とヒマワリン3は困っていた。

「この程度か！ダークメリオ！」

エスト達は吹き飛ばされた。

「ダークヘルロン復活の邪魔をするのなら殺す！」

「そいつがどんな奴か知っているか！」

ゴイサイノヴァンタンは聞く耳を持たなかった。

「スペシャリットキャノン！」

ゴイサイノヴァンタンに命中するも様子がおかしい。

バグリン達がゴイサイノヴァンタンに集まった。

そして・・・

ゴイサイノヴァンタンは、バグリンと融合した。

「まさか、融合しただと！」

「こいつ、やばいな。」

「俺は、バグヴァンタンだ！」

「スペシャリットロケット！」

「勝利亥破！」

「フラワーアレンダー！」

3つの技が命中したがバグヴァンタンはびくとしなかった。

「これはまずい。」

第十一話 バグリンと融合！危機訪れた時の力（後書き）

次回 第十二話バグヴァンタンを倒す決意、エスト4発動。お楽しみに！

第十二話 バグヴァンタンを倒す決意、エスト4発動

バグヴァンタンの強さはかなりのものであった。

エスト達は大苦戦していた。

「このままでは先に進めない！」

セイドー達は何かいいいアイデアないかを探していた。

「セイドー、第4形態だ。」

「エスト、それって。」

「そう、奴を倒すにはそれしかないぜ。」

「よし、行くぞ！エスト3覚醒！」

エストの右手にキャノン砲がくつついた。

一部の体がサイボーグ化した。

「覚醒完了！エスト4！」

「覚醒第四段階だと。ふん、この俺にはそんなもの。」

「スーパーキャノングランド！」

「なにつ！」

エストの力がバグヴァンタンを押さえた。

「よっしゃー！いけーエスト！」

「おーし！」

「このままではクンテン様に。」

「サンセットバーストキャノン！」

バグヴァンタンに攻撃が命中し結晶になった。

ついに隊長、バグロストが動き始めた。

「けっ、バグヴァンタンになっても雑魚だったか。」

第十二話 バグヴァンタンを倒す決意、エスト4発動（後書き）

次回 第十三話 バグロストの地獄の迷路ゲーム、生き残る方法は
覚醒のみ。お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855s/>

ビーボジェネラル

2012年1月11日18時54分発行